滝廉太郎来富125周年記念 特別企画

富山の滝廉太郎

中村 孝一

日本人の魂であるともいわれる名曲「荒城の月」。この曲を作曲した楽聖・滝廉太郎は、少年時代を富山で過ごしている。

今回は創刊４００号を記念し、「荒城の月」を作詞した土井晩翠（ばんすい）とのタイムトンネル対談を企画。富山での約２年間が、滝廉太郎の作曲活動にどのような影響を与えたかを探ってみよう。

楽しかった富山での２年間

土井晩翠（以下、晩翠）　今回、グッドラック創刊４００号記念特別企画として、富山にゆかりのある滝君とのタイムトンネル対談が実現し、大変嬉しく思っています。富山には、明治19（１８８６）年８月に来富以来、１２５年ぶりとのことですね。

滝廉太郎（以下、滝）　ええ、そうなんです。私もこのような機会をいただき、とても光栄です。東京音楽学校では、後に武蔵野音楽大学を創立、初代学長となられた富山出身の福井直秋さんとも交流がありましたので、この場に同席されていたらよかったですね。

私は東京で生まれ、父の転勤で3歳で横浜に、7歳の時に父が富山県書記官（副知事）に任命され、家族全員で北陸の城下町・富山に移り住み、富山県尋常師範学校附属小学校（富大附属小）へ1年生として再入学したんです。音楽の授業が熱心で、横浜と同じく、もうオルガンを使用していましたね。

晩翠　滝君は、わずか23歳10カ月で若死にしちゃったから、7歳から9歳の富山での少年時代の思い出ってとても貴重だよね。

滝　ええ、懐かしいですね。感受性の強い年頃ですし、富山の影響は大きかったですよ。

小学校も城内にあり、毎日散歩に出かけて遊んだものです。石垣に登って立山を仰いだり、城下町の面影を残す市街を見渡したり、お城の後ろを美しい神通川（現在の松川）が青い水をたたえて流れ、笹舟や帆船が行き交っているのを眺めていたものです。ある時、船頭さんの目を盗んで、一人で笹舟に乗って大事件を起こしたりしてね。今振り返ると、少年時代の大冒険でしたが――。

今でも目をつぶると、楽しかった日々がまぶたに浮かびます。

晩翠　私の目にも見えるようです（笑）。

滝　あれはよく晴れた春の一日、陽が当たってポカポカと暖かく、岸辺でうつらうつらしている人も見られて。実は組曲「四季」の中の「花」はあの頃を思い出して、作曲したんです。

晩翠　エッ、あの有名な「花」をですか？「春のうららの隅田川、のぼりくだりの舟人が――」と始まるので、てっきり向こうの川かと思っていました。

滝　ええ、でも隅田川は都会の川、作曲のイメージとなると、やはり、少年時代に見た情緒あふれる神通川（松川）が思い出されてきて……。ですから、富山の皆様が歌われる時は、「神通川」に置き換えていただければと。

晩翠　なるほど、小学校の横をのどかな神通川が流れ、そこで学び遊んだイメージだったと。

滝　あののどかな神通川が、「花」の曲のイメージとなって……。

晩翠　そうか。実は私もひそかにそうじゃないかと――。

滝　少年時代に受けた印象って大きいですからね。同じく「四季」の中の「納涼」、「月」、「雪」も、富山の夏、秋、冬、を思って作曲したんですよ。

晩翠　なるほど。それで不朽の名曲「荒城の月」も、富山城をモチーフに作曲したと……。

滝　ええ、私は2年足らずで富山を離れ、その11年後、20歳の時に「荒城の月」を作曲したんです。

晩翠　富山城の思い出というと。

滝　あの頃を思い出すと懐かしいですね。本当に懐かしい……。実は富山城の外堀を埋め立て、その跡に総曲輪が誕生したんですが、あの時、私も砂を運ぶお手伝いをしたんですよ。

ある夜、富山城内を散歩していて、月の光が石垣を照らしているのを見て、思わず目を奪われたものです。「荒城の月」を作曲する際、あの時の光景が楽想となってよみがえってこようとは――いや本当に幸運でした。

晩翠　なるほど。当時の富山城址は今の6倍もあり、大きな松や桜の木が生い茂り、城内はうっそうとしていたようだね。

滝　ええ、春には満開の桜の下、酒宴がはられ、盃が酌み交わされて――。後に音楽学校で晩翠さんの「荒城の月」の詩を見せられた時、あの時のことがよみがえり、インスピレーションがひらめいたんです。これは富山城のことが書かれているのではないかと……。

「荒城の月」のテーマは〝敗者の悲哀〟

晩翠　そうか。その頃の富山城は、まさに「荒れ果てた城」そのものだったんだなあ。

私が「荒城の月」を作詞することになったのは、東京音楽学校が文部省の依頼で中等唱歌集の編集を企画、当時の文士にそれぞれ出題して、まず作詞を求めたことがきっかけだったんだよ。

滝　そういえば、当初、音楽学校が「古城月」と題を決めていたのを、晩翠さんが「荒城の月」に変更なさったそうで。

晩翠　ああ、「古城月」では歳月を経た古い城のイメージだけで、〝敗者の悲哀〟が感じられないからね。

滝　なるほど。晩翠さんの回想文にも、「この題を与えられて、まず第一に思い出したのは会津若松の鶴ヶ城であった」、と。

晩翠　うん、実は小さい頃から戊辰戦争で鶴ヶ城が落城していった様子を聞かされて育ったんだよ。だから、「荒城の月」のテーマを〝敗者の悲哀がこもった、荒れ果てた城〟にしたかったんだ。

滝　そうですか。確かに私の体験

サクラパックス(株)

からもそれは言えますね。

富山城内で2年間過ごした後、東京へいったん戻った私は、父の仕事の関係で10歳の時大分に、12歳で竹田に、14歳の時にまた東京にと、本当に忙しい生活でした。そして、不思議なことに竹田にも岡城という城があったんです。

晩翠　なるほど、滝君が作詞した「古城」は、この岡城を題材にしたんだったね。

滝　ええ。岡城は800年以上も前に築城され、一度も戦いに敗れたことがない難攻不落の城と言われ、苔むした「古城」の印象そのものでした。ですから、晩翠さんの「荒城の月」の詩稿をいただいた時、心に高ぶりを感じながらも、私の書いた「古城」と、晩翠さんの「荒城」の違いに驚いたものです。

晩翠　〝古城〟と〝荒城〟では、城は城でもイメージが全然違う……。

滝　ええ、「荒城の月」の歌詞はこうなっていますね。

一、春高楼の花の宴
　めぐる盃かげさして
　千代の松が枝わけ出でし
　むかしの光いまいずこ
二、秋陣営の霜の色
　鳴きゆく雁の数見せて
　植うるつるぎに照りそいし
　むかしの光いまいずこ
三、いま荒城の夜半の月
　変わらぬ光たがためぞ
　垣に残るはただかづら
　松に歌うはただあらし
四、天上影はかわらねど
　栄枯は移る世の姿
　写さんとてか今もなお
　ああ荒城の夜半の月

晩翠さんの詩は、自然の中の城跡と、敗れた人の想いが息づき、大変優れた作品です。それに対して私の「古城」は、歳月のみを経た勝者の城。晩翠さんが「荒城の月」のテーマとされた、〝戦乱の世の栄華と哀愁〟にはほど遠いものです。

晩翠　なるほど。

日本人の郷愁を誘う名曲「荒城の月」

滝　岡城には〝古城〟を詩作する題材はあったんですが、晩翠さんのテーマとされる〝敗者の悲哀〟のこもった〝荒城〟のイメージがなかったんですね。少年の頃、竹田の町の人の自慢話として聞かされた岡城は、島津の大軍3万にも敗れることがなかった難攻不落の古城。一方、富山城は、戦乱の世に上杉謙信や豊臣秀吉などに何度も敗れた、〝敗者の悲哀のこもる、荒れ果てた城〟だったわけです。

晩翠　なるほど、富山城址には、私が題材とした会津若松の鶴ヶ城と非常に似通った歴史と精神が漂っていたというわけですね。

滝　ええ、私は鶴ヶ城は見たことがありませんでしたから、晩翠さんの「荒城の月」の詩稿を見て、まず第一に思い出したのは、子どもの頃聞いた富山城にまつわる戦乱の世の栄華と哀愁だったわけです。織田信長が殺された後、城主佐々成政が寵愛していた早百合姫を惨殺。早百合姫は死の間際に、「私の憾みで立山に黒百合が咲く時、佐々は滅びるでしょう」と予言、その通り、黒百合が咲くと秀吉の大軍10万が押し寄せ、富山城が滅びるという、富山城には鶴ヶ城と同様、まさに「荒城の月」のテーマである、栄華と哀愁が漂っていたんですね。

この「荒城の月」のテーマである〝敗者の悲哀〟をどう曲に表現するか、これが最大の課題でした。そこで、「荒城の月」の歌詞をしっかり脳裏に刻み、音楽学校の行き帰りに曲を付していったのです。

あふれ出る旋律と眠れぬ夜

晩翠　滝君の頭には、「荒城の月」のメロディーが何曲も刻まれていたんでしょうね。

滝　ええ、何曲も浮かんでくるので混乱していました。富山城で遊んだこと、桜の花の下での宴、酌み交わされる盃、そこにさす影、松が大きく枝を張っていましたね。そして、夕方、城壁の上を雁が何羽もガーン、ガーンといって飛んでいく。やがて青白い月の光が、石垣や木々を照らし出し、昔の栄枯を物語ってくれる。

富山城址の懐かしい記憶がよみがえり、「荒城の月」の詩の世界がだぶって浮かんできたものです。

晩翠　なるほど……やはり富山城がモチーフに……。

滝　眠れぬ夜を過ごしていましたが、楽想がはっきり浮かんでくると、あとは一曲に整理することでいいのです。五線紙を広げ、音符を書きなぐっていきました。

晩翠　「荒城の月」誕生の瞬間ですね。興奮しますね……これは。

滝　作曲し終えると夜明けが待ち遠しくて――。家にピアノがありませんので、早く学校へ行ってピアノに「荒城の月」の楽譜をのせたかったんです。空が白々としてくると、家を飛び出して学校へ急ぎました。

晩翠　音楽学校の小使いさんが、朝早く、滝君が門内に駆け込んできたので、ビックリしたと。

ところで、「荒城の月」について、ある音楽の本に「この頃は『君が

代』を知らない子供がいるそうだが、『荒城の月』を知らないものはまあるまい。もう肉体化されて、これこそ〝日本民族の歌〟、という感じがする」とありましたね。

滝　嬉しいですね。「荒城の月」のテーマである、戦いに敗れた敗者の悲哀が、日本人の魂の琴線にふれたんでしょう。

晩翠　お互い、本当に光栄なことですね。その他、富山時代を懐かしんで作曲した曲というと？

富山の思い出が数々の作曲のモチーフに

滝　たくさんありますよ。富山の雪は特に忘れられないですね。大雪になろうものなら大喜びで外に飛び出して、雪だるまなんか作ってね。雪は楽しい遊び相手でしたから。「雪やこんこん」はそうした懐かしい富山時代の作品です。

それから「かちかち山」はおばあちゃんが雪の降る夜「むかしむかし」と言って、よく話を聞かせてくれましたので、それを思い出して作曲しました。

また小学校の遊戯会が父兄を招いて開かれた時、桃太郎の話をしたんですが、これが先生からも褒められるくらい好評で、後で「幼稚園唱歌」を作曲する時、そうした富山時分が懐かしくて、「桃太郎」を作詞作曲したんですよ。

晩翠　なるほどね。

滝　それに、秋に渡来し翌春まで姿を見せる雁の鳴き声が印象に残っていますね。ガーン、ガーンあるいはカリカリと聞こえ、沈黙した富山城を照らす月の夜には、りょうりょうとして特に鋭く聞こえ、今も耳に残っています。その時の思い出を作詞作曲したのが「雁」なんですけどね。

晩翠　素晴らしい！曲があふれてくるんですね。まるでモーツァルトみたいですよ。そういえば、滝君は後に、日本のモーツァルトとか、シューベルトとか言われるようになるんでしたね。

滝　まだあるんですよ。「お正月」の曲も富山時代の作品です。

晩翠　ああ、あの「もういくつ寝るとお正月、お正月には凧あげて、コマを回して遊びましょう」という曲。お正月が早く来てほしいという、子供たちの気持ちがとてもよく表れていますね。

滝　それから「鯉のぼり」。この曲は、富山から東京に移る時――その日は明治21（1888）年5月1日の真っ青に晴れ渡った日だったんですが――、人力車に乗っていて商家の屋根に鯉のぼりを見つけたんです。富山にも節句がくるんだなあと、その時思いましたね。

「荒城の月」誕生のエピソードを秘めた富山城

そういう懐かしさが「鯉のぼり」を作曲している時に思い出されて、胸がジーンとしてきましたよ。

晩翠　なるほど。滝君にとっては、富山は心のふるさとなんですね。どの曲を作曲する時にも、懐かしい富山時代が思い出されていたんですね。今、富山は歴史と伝統に裏打ちされた文化の街、「荒城の月」の名曲が流れる〝水の都〟をテーマに街づくりを進めているそうですね。

滝　いいですね。「荒城の月」を作曲した後で、文部省から派遣されて、ドイツのライプツィヒへ留学したんですが、その街が歴史と伝統の上にしっかりと築かれているのを見て感動したんですよ。

晩翠　そういえば、ライプツィヒの道路には、そのゆかりの音楽家の名前がつけられていましたね。モーツァルト通りと交差したフェルディナンド・ローデ通りに面して、なんと滝君、君の記念碑もありましたよ。

滝　ええ、ライプツィヒ音楽院に2カ月ほど学んだ記念に、市の方でブロンズ像を作って下さったんですよ。ありがたいことです。

晩翠　なるほど、富山も「荒城の月」ゆかりの地として滝君のブロンズ像を作り、イメージアップをはかっていかれるとよいですね。これからも、滝君と二人で富山の発展を見守っていきましょう。GL